

「私の名前は赤崎です。“赤”が入っていますが、今日は“青”の話をします。」生真面目な先生がまさかジョークからスタートとは、意外な一面を見た気がした。

去る4月1日に92歳で逝去した赤崎勇先生が、ノーベルレクチャーに登壇されたときの言葉である。先生は、1929年鹿児島県に生まれ、1952年京都大学理学部化学科を卒業後、神戸工業、名古屋大学、松下電器、再びアカデミアに戻り、名古屋大学、名城大学と69年間の研究人生を歩まれた。企業で24年間研究されていたことも、イノベーションを生み出す背景にあったのだろう。

あきらめなければ道は拓ける

私が日本化学会の常務理事をしていた2013年6月、先生が名誉会員に決定したことを伝えるため、玉尾皓平会長（当時）と一緒に名古屋大学赤崎記念研究館を訪れた。10分程度で終わる予定だったが、私が、先生が卒業された鹿児島二中（現 甲南高校）の後輩だと伝えると、鹿児島弁を交えた思い出話から始まり、さらに実験装置やデータなど研究の話が止まらなくなり、結局3時間近い訪問となった。

2014年5月、ストックホルムにて、日本化学会が企画した第3回日欧科学技術イノベーションシンポジウムで赤崎先生に講演いただいた。講師紹介を担当した私は、世界地図から日本地図、鹿児島の地図と順にスクリーンに映し出し、先生の生い立ちを話した。青色LED発明の偉業につながる不屈の精神を育んだ土地を、「あきらめなければ道は拓ける」という先生の言葉とともにぜひ知ってもらいたいと思ったからだ。なお、電気電子の世界最大の学会であるIEEEのエジソ



青色LEDの発明で 世界を明るくした Persistent Researcher 追悼 赤崎 勇 先生

ンメダルを受賞されたとき、Persistent Researcherと紹介されたそうだ。先生は、木に竹をつなぐような難しさといわれていた技術で窒化ガリウム（GaN）とサファイア基板をパッファーでつないで高品質GaN結晶の作製に成功し、p型GaNの実現までのブレイクスルーや青色LEDの発明など、青色LED研究の歴史について講演された。ノーベルレクチャーの内容とほぼ同じ、予行練習だったのかもしれない。

このとき「もう一度ここに一緒に来られるはず」とひそかに信じていた。果たしてその半年後に「高輝度・低消費電力白色光源を可能とした高効率青色LEDの発明」でノーベル物理学賞受賞となり、現実のこととなった。ノーベルレクチャーでは70年代からの研究の経緯を話されたが、その翌日のノーベル博物館での記者会見で、館長から研究のきっかけを問われたことで先生の心に火がつき、60年代からの経緯を熱く語るあまり、予定時間を大幅に超えてしまった。研究のことになると夢中になってしまうのは、研究に対する情熱の表れとし

か説明のしようがない。

昨今、サイエンスのポピュリズム化への懸念が示されている。世界中の研究者がGaNをやめていくなかで、青色LEDを実現するにはGaNしかない信じて、「我ひとり荒野に行く」と覚悟し、やり遂げた赤崎先生の思いを、研究者だけでなく、次の時代を担う若者に語り継いでいかなければならないと強く思う。

仲間こそが宝

受賞後、鹿児島に帰られた際にご一緒させていただいた。先生の思い出の詰まった場所でお聞きしたことを振り返りたい。先生が通った大龍小と二中の有志による敬天会は、島津藩の武士の子弟の教育法に由来し、教師が正解を教えるのではなく、先輩が後輩を育成し、世代を超えて互いに切磋琢磨するという御中教育の流れをくむものだった。その活動に憧れ参加した先生が学んだことが「議（言い訳や屁理屈）を言うな」、「嘘をつくな」、「弱いものをいじめるな」であったという。毎週日曜早朝、敬天会の仲間と西郷隆盛を祀る南洲神社境内や墓地の掃除を黙々とやっておられたそうだ。先輩から欧州のアカデミア（オックスフォード大学やケンブリッジ大学など）のことも聞き、夢を膨らませたこともあったとのこと。

人間としてまた研究者として、生真面目、謙虚で、人との交流を大事にされる先生の生き方は、青年期に心身を鍛錬する機会に遭遇したことがおおいに影響したのだと思う。いつも研究仲間の皆さんと親しげに交流し、私たちの冗談には笑顔で答えてくださり、とりわけ天野浩先生が共同受賞者というよりお弟子さんとして振舞う姿を見て、赤崎先生がいかに人間関係を大事にしてこられたかということを実感した。

近親者だけで行われた葬儀では、車まで棺を運ぶ手伝いをさせていただいた。その重みを感じつつ、ノーベル賞授賞式のステージ中央で堂々と背筋を伸ばした先生の姿が目につかぶとともに、「あきらめない心」を改めて心に刻んだ。

（川島信之）



ノーベルウィーク中、ストックホルムにて（右が赤崎先生、左は筆者）